

南風

南照寺 寺報 第六号 平成二十五年 秋

爽秋の候、朝晩過ごしやすくなりました。

さすがにお彼岸には、お墓参りの方がかなりお見えになり、新坊守も、うまくお会いできた御門徒様と、挨拶だけでも交わすことができてちよつとほつとした、というような事を報告してくれました。晴天が続き、いい彼岸会であったように思います。

お勤めの会の方も、やはりお彼岸ということもあって、装束をあらためて阿弥陀経と正信偈、という重い形のものにいたしました。正信偈については、皆さんと御一緒に、同朋奉讃式をお勤めさせていただきました。その後は今後の南照寺について、行事のことや、お墓参りにことや、セキュリティのことなどを御意見いただきました。門徒総会の予行演習のような雰囲気、親睦を深められたのではないかと思っております。

毎月お寺で集いを持って、一体どんな取り決めをするのかと見ているのですが、特になにか大したことがあるわけではないようです。

新聞、毎月いっぱい書いてありますけど、もっと簡潔に用件だけをお知らせした方が、書く方も読むほうも楽なんじゃないでしょうか。

○×先生のお話、本当に素晴らしかったですよ、思わず聞き入ってしまう位……内容ですか？ええっと、それはあんまり覚えてなくて……

言葉というのは、実に不思議なものだと思います。

いましがた、やり終えた仕事や遊びについて、書き留めることで「保存」することができます。

もっと以前にやり終わっている、さまざまな営みで

あったとしても、いま読むことでそれを「出来事」として知ることができます。

記されたものがある限り今後ずっと、必要な時に出すことができる「変わらないもの」にする、ということとです。

話すだけでも、命令や契約なんかは同じようなはたらきをするのでしよう。相手が「忘れる」のと、書いた紙が「なくなる」のとの違いがあるだけです。

(ちなみにお経が現在まで残っているのも、言葉のおかげです。)

でも、「言葉の重要な役割とはそれだけのこと、そのようなものだ」とするのはどうでしょう。

言葉は必ず、「誰か」に向かって投げかけられます。相手があるのです。

返答がなかったとしても、「返答がない」というあり方で返答を感じることができます。

お墓などで、「お参り」と言い得るのは、そういう心の行き来があるからでしょう。

しかし、「誰か」ではなく「あなた方」に、いや「あなた」に話しかけているのだという場合に、より一層大きな力が感じられるのは、その人物の表情や目線、仕草などから発せられる、「言葉以上のメッセージ」をしつかり感じ取りやすい、ということも大きな理由でしょうが、それだけではありません。

「あなたと二人だけで、この言葉によって立ち現われた世界と一緒につくっていきましょう。言葉の糸を重ね合わせて、物語を織り上げていきましょう。」

そういう思いが、「言葉」には込められているからなのです。

……こちらが先ず、「言葉の糸」を相手にさし渡す。

相手はそれを喜んで納め、それに答えて、こちらに相手自身の「言葉の糸」を「返礼」としてさし渡す。

それを謹んで受け取って、さらにこちらも別な色の糸で「お返し」をする。

相手はそれに応じた色の糸を差し出す……

この「言葉」というプレゼントを、お互いに渡しあ
いすることで、その場に共通の話というものが織り上
がるのです。それはおおげさにいえば、その時にとつ
さにできる、その場にとてもしつくりくる即席の「物
語」を共作するということです。

「あなたと二人」のとき、あなたの糸と、こちらの
糸の二本だけで、物語は百パーセント全部、二人のも
のです。

もう一人その場に居合わせたら、その人のと三本の
糸で織り始める物語で、別に四人いたのなら、合計六
本の糸を使うわけです。

そのぐらいならまだ「物語」は、その場に居合わせ
た者だけの「自作品」でしょう。

しかし、さらに人数が増えつづけると、どうでしょ
う。

そもそも話す量、つまり糸の長さは、それなくて
も人によってさまざまなうえに、沢山の参加者ともな
れば、いよいよプレゼントの嬉しさが「うすく」なっ
ていくのは仕方ない事です。

講演、演説ともなれば、もうこのはたらきはほとん
ど失われます。

そしていつしか言葉の「伝達内容」ばかりが取りざ
たされて、その、より古くて、なじみ深い「重要な役
割」については、気がつかなくなってしまうか、忘れ
去られてしまっているのか、ほとんど重要視されてき
ませんでした。

近頃「雑談力」とかなんとか言われ出したのは、恐
らくそのあたりの消息に気付きだしたということでは
ないでしょうか。

浄土三部経の『大無量寿経』の中に、「和顔愛語」
とあって、菩薩の修行の一例として挙げられています。
柔和な顔つきで、優しい言葉をかける、ということだ
しょう。この場合、プレゼントは菩薩行ですから「布
施行」ということになります。ちなみに菩薩というの
は、これから「仏」になっていこうとする者のことだ
す。

「他を救うことが自らの救いとなる」という「自利
利他円満」が、菩薩精神であります。

菩薩道というと、とてつもなくすごいレベルの修行
と捉えがちですが、それは「完成する」ということが
べらぼうなことであるだけで、内容でいえばここでは
結構身近なことだったりします。

「楽しくおしゃべりすること」ですから。

布施行についても、現代の西洋学者が「人間は自分
がほしいものは他人から与えられるといった仕方だ
しか手に入れることはできない」ので「私たちが欲す
るものは、先ず他者に与えねばならぬ」なのだ、とい
うことを「社会の起源」として発見した、などと書い
ているのを読んで、やっぱり私たちの中で普通のこと
をいつてるのだなあ、と、感じております。

これもここでの文脈で、文意をつづめていえば、

「仲良くしましょう、よろしくね。」

というだけのことなのでしょ。

言葉はもともと、それ自体で価値があるのでしょ。
私たちはいつもそれを誰かにプレゼントしたくて仕
方がないのかもしれない。

とりあえず「交換すること」が大事なのですから、
話している内容はこの際、あんまり問題でないです
(内容はもちろんあつた方がいいでしょうけど)。

そういう見方で考えると、実は法座もお勤めも月参
りも法話も訪問も新聞も、忘れかけ、失いかけてい
る「何か」を取り戻す仕事である、ということに焦点し
ていることが、見てとつていただけるのではないかと
思います。

さあこの「何か」が指し示す、うまくとらえられな
いものを、見つけに行かねばなりません。

十月十九日(土)は午後二時より 報恩講

次回の、南照寺本堂での「お勤め」の会は、
十一月十六日(土)午後二時より です。